

〔倭訓栞前編二十五〕ひさかた 天の枕辭にいへり又空とも日とも月とも星とも雲とも雨とも

も屬けたり或は都ともつゞけよめるは天都の意なるべし鏡ともつゞけり天鏡の義なるべし又たゞひさかたとのみいひて空の事月の事としたる歌も見えたり久かたの光りのどけ

き春の日にとも見えたり萬葉集に久方又久堅に作れり天先成とあれば久方といふにや漢書の注に蕩々天體堅清之狀とも見えたり續日本後紀の長歌に瓢葛ヒサカタと書るは訓を假たるもの也されど禮記に器用陶匏以象天地之性也ともいへば匏象ヒサカタの義も據ありともいへり

〔萬葉集二挽歌〕高市皇子尊城王殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌○中
久堅之天所知流君故爾日月毛不知戀渡鳴

〔萬葉集五雜歌〕神龜五年七月二十一日筑前國守山上憶良上 令反惑情歌一首并序○中
比佐迦多能阿麻遲波等保斯奈保奈保爾伊弊爾可弊利提奈利乎斯麻佐爾

〔續日本後紀九明〕嘉祥二年三月庚辰興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十○中
○中 瓠葛ヒサカタ天能 梯建ハシダテ踐歩フミ美天降利坐モリ志大八洲オホヤシマ天津日嗣能高御座萬世鎮五八能春爾ハルニ有下略

〔新撰字鏡〕乾天 天台於保曾良

〔類聚名義抄七〕字音羽 宙音胃 空口公反 霄音消 雨于遇反

〔同七〕屭虛上通中下正 虛通 碧落同

〔伊呂波字類抄〕天波 翠漢ルソラ 碧落同

〔東雅一〕天文略 天又ソラといひし事は太古の語なりとも見えすアメといひソラといふ斥言ふ所同じからず古事記に太古の初陰陽の二神大倭豊秋津島を生む又名は天御虛空アマノソラに翔行き巡視て天降り給ひき虚空みつ日本國とは即是をいふ歟とまるされ又古事記に彦火と見えたりこれら上古の時の事にソラといふ語の見えし始なり然るに我國の語に天をさしてチホソラといふは則阿修羅アスラなりすべて上古の語に梵語多かりなどいふ説あり天下の言も